

古き調 : 文苑

著者	白月
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 2 3
ページ	6 8 - 7 0
発行年	1907-12-25
URL	http://hdl.handle.net/2298/6080

東屋はなれざしきの南窓みなみまど

紫檀しぜんのにぞう文机ぶんぎに

君きみや凭たかれてふくよかの

圓まら玉首たまがしらの眞玉手まぎまてに

馨あかりは高たかき唐墨からぼくを

赤間あかま關硯せきまがねに當あてつらむ。

紅葉もみぢ流ながるゝ透すかし画ゑの

卷紙まきかみさらと擴ひろげては

よき歌うたもがと項曲うなじまげ――

多澤さわの前髪まへかみ揺ゆれにけむ。――

筆ふでの穂ほさきをみつむると

鳩つばきの腫はれぞ忍しのびるゝ。

折し々しもらす、ため息ためいきは

鬢かみの後毛ごうもうゆらがして

餘あまりは紙かみに戰たたぎけむ

牡丹ぼたんを匂におふ唇くちびるに

六十八

印紙しるし、封ふうじ目め、――當時そのかみの

接吻くちづけのごと、――觸ふれにけむ。

燒やくに脚踏たかう夕ゆふかな――

涙なみだし流ながる徒たらに。

夢ゆめか文ぶんがら火かにすれば

薄霧うすぎり落おちて低ひく這わふ

煙けむりの末すえの立たち姿すがた――

抱かかれば消きえて三さんヶ月げつの影かげ。

古ふるき調しらべ

月清つききよく

松風しょうふうくらき磯いそづたひ

たもわ背せむひけて行いくは誰たれぞ

戀こひならば

母ははや待まちつらんとく歸かへれ

白

月

近くは家も見わざるに

しわざるれ

世をすねて

たゞたはぶれの

月を追ひゆく途あらば

すさびとて

語れやきかん君がうへ

かろくふきたる

そやなれど

戀と見て

ほそきやじりは

するごくも

咎めん人のきたりあは

可笑からずやたわやめよ。(磯つたひ)

かよはきむねを

つらぬけり

○

こしばがくれを

むねのにこげの

ふかければ

よろぼひいでし

ちくほのいろは

みねすとも

むねにさよりし

うけたるきすの

いつのひか

ふきやこそ

わがつみふかき

いわんぞすらん

○ 二すゞめよ(こひ)

百合、いろがねの花散りて
 いづみのうたも、老去れば
 くさ野にこもるあつひめが
 樹かげのゆめのくつがへり
 みくるまとほくたもむろに
 ゆうべのくもにまぎれいり
 いつとしもあきはがらかの
 秋のけはひはせまりきぬ

うみはしらべをあらためて
 やまはよそほひかへつべし
 あふ、百川のひびきだに
 いつしかさびて濃みどりの
 そらゆくかせのあけくれに
 ことある味をもたらし
 なみにまぎるすいそ寺の

七

暮鐘の冴ねもれのづから—

ぶどうのふさはむらさきに
 その葉がくれ露はらみ
 むねの和毛はしらもとの
 はなにも似たる小羊の
 牧場のむねはあたふかき
 夢こまやかにやはらぎの—
 さらばうたはんまき人の
 音はほそくとも秋のうた
 現、たちつくすくさの野に
 みつるよ、清きさふやきの
 秋が、のりこし白駒の
 黄金ぐつはの、ひびき音が
 芦のふねの音、まきのうた
 葉すれのさやぎ、虫のこゑ
 こりてすゞしくあめつちに
 とよもくわたる秋のこゑ聲(秋のうた)